

[コメント]

工業高校生の離職率調査の結果をみて

東海地区工業高等学校長教育研究会長
愛知県立愛知工業高等学校長 吉見 和俊

全国工業高等学校長協会では、5年前から工業高校生の離職率調査をしている。2006(平成18)年から2008(平成20)年までの3年間を近畿地区で実施し、2009(平成21)年から東海地区(愛知、岐阜、三重、静岡)が引き継いでいる。卒業生全員に対し悉皆調査をすることが望ましいが、進路指導担当教員に多大な負担をかけるので、各学校で2学科を抽出しアンケート調査をしている。ただし、全体として工業高校生の実態が反映されるように、特定の学科に偏ることがないように配慮している。

今回の調査で、東海地区の工業高校生の就職後3年以内の離職率は、18%であることがわかったが、機械系と電気系に限れば、離職率はさらに低くなる。機械系、電気系は求人倍率が高く、就職先を決めるときも、自分の意志が反映されやすいことや、女子が少なく結婚等による離職がないこと等が理由としてあげられる。逆にデザイン系は、女子が多く、就職先も限られるため、自分のやりたい職業につくことが難しいことが、離職率を高くしていると思われる。県別では、愛知県がやや高いが、これは大企業が多く、就職に関してはきわめて恵まれた環境にあるため、離職しても再就職できるという気持ちが反映しているのではないかと思われる。

全体として工業高校生の離職率が低いのは、次のような理由が考えられる。

- 1 高校入学時にすでに高校卒業後の就職を意識して入学してくる生徒が多い。
- 2 学校が、1年次から、様々な就職に対するガイダンスや意識づけをしている。
(会社見学、工場見学、外部講師による職業講話、卒業生との懇談会等)
- 3 校内での実習の授業があり、工場等に比較的近い環境(建物、服装等)で学んでいる。

企業の人事担当者に聞くと、普通科出身者は、髪が乱れるという理由から作業帽をかぶることや、朝の朝礼で整列し、大きな声で挨拶をすることでさえ抵抗を感じる者がいるそうだが、工業高校生は、すでに習慣として身につけており、入社後の導入時点ですでに意識の差があることが伺える。

また、保健室に配属されている養護教諭から、「普通科の生徒と較べると、工業高校の生徒は、心の健康度が高く、保健室の利用度が低い」というような実態をよく聞く。このことは、受験や親の大きな期待というプレッシャーが薄く、伸び伸びと自分の好きな事を思いっきりやれることからくる結

果だと推察される。確かに保健室を訪れる生徒数は、どの工業高校も非常に少なく、ましてや、病気以外の悩み事相談や、特段の相談もないと思われるのに、保健室を訪れるような生徒は少ない。

普通科の生徒は、キャリア教育の不足から、卒業時に就職に対する漠然とした期待と、実際に就職をしてみて感ずることのギャップが非常に大きいことと、求人数が少ないために自分の希望する会社に就職できていないことが離職率の高さとして現れていると思われる。

企業側は、就職者に対して①基本的な生活習慣がしっかりしていること、②基礎学力があること、③コミュニケーション能力があることの3点を求めることが多い。工業高校では、基本的な生活習慣や挨拶等の指導は徹底されており問題はないが、今後の課題としては、基礎学力をもっと高めることや、自分の考えをはっきり伝える能力をもっとそなえさせる必要がある。

今後も、工業高等学校校長会は工業高校の離職率調査は継続して実施する意向であるが、このような傾向は今後も大きく変化することはないと思われる。離職率の調査結果は、工業高校の教育が、他の学科と比較して相当機能していることは明らかであるけれども、今後、すべての高校がキャリア教育を推進していかねばならないことを示していると言えよう。